

輝け☆ スポーツマン

のじぎく兵庫国体☆

セーリング成年男子470級 7位

小野元弘さん

(23歳・牛窓町牛窓)

小野さんは、今年3月ごろから岩崎裕児さんとペアを組み、艇をコントロールするための基本的な動作の練習、セールの調整を行ってきました。牛窓はあまり風が吹かないので、吹く時に、集中して練習しました。

スタートが苦手なので、周りに艇がない所からスタートするよう心掛けました。そのスタートが上手くいったのが、この結果につながったと思います。第3レースで1位になったときは、前に誰も



いなくて、気持ち良く走れました。入賞を目標に取り組んできたので、その目標が達成できてうれしかったです。来年、次の国体も出場することができたら、また入賞を目指したいです。

のじぎく兵庫国体☆

ボート 成年男子ダブルスカル 7位

竹内信二さん (39歳・長船町土師)

春名真一さん (31歳・長船町土師)

性を競う競技です。

竹内さんと春名さんは、平成7年からペアを組み、3年連続国体に出場。また、平成15年から再びペアを組んで、4年連続ペアで国体出場という実力の持ち主です。

毎日、練習を欠かさない二人。パワーと持久力を付けるため、ウイトトレーニングにも精を出します。

「全体のレベルが高かっただけに、入賞できてよかった」と春名さん。竹内さんは「23年間、ずっとボート選手で頑張ってきました。今大会もいい思い出になりました」と国体を振り返りました。



竹内さん(左)・春名さん(右)

のじぎく兵庫国体☆

体操 成年女子団体総合 4位

藤井万弓さん (20歳・牛窓町鹿忍)

国体の体操は、跳馬・段違い平行棒・平均台・ゆかの演技を行います。1チームの選手は5人で、各種目それぞれ4人の選手が演技を行い、上位3人の得点総合計でチームの成績順位が決まります。

藤井さんは、跳馬・平均台・ゆかに出場。昨年の12月に左手首の手術をし、一時は肩にも影響が出

て、手が上がらない時もありました。復帰には時間がかかりましたが、国体に出たいと強い思いがあり、リハビリに頑張りました。手首に負担の掛かる平行棒は断念しましたが、つらい思いを乗り越えた分、入賞した感動は大きいものでした。国体へ一緒に出場したメンバ

ーは、中学・高校時代のクラブのメンバー。だから、本心が言えたし、聞いてもらえ、とてもやりやすかったです。けがのことで、自分の中に不安はありましたが、周りのみんながカバーしてくれました。コーチや監督も「今できる自分の演技をしてください」と言ってくれました。とてもいい環境で国体に出場し、力いっぱい演技できて本当に良かったと思っています。



藤井さん(前列右から二人目)

全日本マスターズ陸上競技選手権
棒高跳びと十種競技で優勝

鎌田真澄さん (65歳・長船町福岡)

第27回全日本マスターズ陸上競技選手権大会(9月16〜18日・宮城県総合運動公園宮城スタジアム)や第17回全日本マスターズ混成陸上競技選手権大会(9月30日〜10月1日・石川県西部緑地公園陸上競技場)に出場した鎌田真澄さん。

宮城県の大会では、男子65歳クラス(65〜69歳)棒高跳びで優勝。また石川県での混成大会でも同クラスの十種競技(100歳、走り

幅跳び、砲丸投げ、走り高跳び、400歳、100歳ハードル、円盤投げ、棒高跳び、やり投げ、1500歳)で優勝しました。加齢など感じさせない筋肉と日焼けした笑顔が印象的です。

学生時代に陸上をしていたものの、長いブランクを経て、再び陸上競技を始めたのは、50歳を過ぎたからで、特に棒高跳びとハードルは60歳になってからでした。現

在は、毎朝10〜12キロのジョギングや週2回の神崎山陸上競技場での練習、長船スポーツ公園体育館でのウイトトレーニングなどに励んでいます。

年に10回程度、苦手のハードルや棒高跳びの実践練習を兼ねて、各地の大会に参加して記録に挑戦しています。「体を動かすことは、楽しいです。参考書を読んだり、人に教わったりしながら、自分で納得した動きができたときは面白いですよ」と、いきいきと話す鎌田さん。「継続は力なり」。これからも記録への挑戦が続きます。

